



## ■開校 100 周年記念式典式辞

本日、緑かがようこの佳き日に、島根県知事・丸山達也様、島根県議会副議長山根成二様、雲南市長石飛厚志様をはじめ多数のご来賓の皆様にご臨席を仰ぎ、ここに島根県立三刀屋高等学校開校 100 周年記念式典をかくも盛大に挙行できますことは この上ない大きな喜びであります。教職員を代表し心より御礼を申し上げます。

また、これまで本校の教育を推進し、その発展に多大な貢献をなされた皆様に対し、この記念すべき場をお借りし、深い敬意と感謝の念を捧げたいと思います。

さて、本校は、今から 100 年前の 1924 年（大正 13 年）のまさにこの日この時刻に現在も三刀屋高校の校舎がそびえる雲南の高台「三刀屋が丘」に県内 5 番目の旧制中学校として 55 名の入学生を迎え開校しました。生徒の皆さんには、開校初年度の入学生 55 名の方々の希望とやる気に満ち溢れた熱い“110 の瞳”を思い浮かべてもらいたいと思います。雲南地域の学生にも現在の大学にあたる高等教育の道を拓くべく中心となって尽力されたのが、藤原 薫氏、松尾清三郎氏、第 21 代田部長右衛門氏の 3 名の方々です。本校開校により雲南地域から上級学校進学への道が拓かれ、進路選択の可能性が大きく広がるとともに、雲南地域の発展に大きく寄与することとなりました。

1948 年（昭和 23 年）には、戦後の学制改革により島根県立三刀屋高等学校と改称、翌年からは男女共学制の学校となり、進路選択の可能性がさらに広がりました。その後、頓原分校の開設分離、定時制課程の併設や募集、あるいは家庭科の新設や募集停止、掛合分校の開設、総合学科への改編など数々の歴史を刻みながら、これまで 17,000 名を超える有為な人材を社会に輩出してまいりました。卒業生の皆様は、国内外の様々な分野でご活躍になり、高い評価を受けてこられました。卒業生の皆様が社会に大きく貢献されている姿は、私たちにとりましても大変名誉なことでもあります。

開校 100 周年を迎える今年は、本校が県内唯一の普通科をベースとした総合学科の学校として生まれ変わってから 20 周年という節目の年でもあります。総合学科改編の翌年、総合学科棟竣工式に合わせて挙行された創立 80 周年記念式典式辞において、第 28 代景山 寛校長は、総合学科について次のように述べています。「総合学科につきましては、将来の職業選択を視野に入れ進路への自覚を深め、生徒一人一人の個性を最大限に生かす学科であります。本校の総合学科は、普通科の基盤を踏まえ、『進路目標を、個に応じてより高いレベルで実現すること』を目標にしています。職業観・勤労感を育み自己実現を図る総合学科の設置は、これから巣立ちゆく生徒の皆さんが大きな社会の中で力強く生きていくための基盤を育てる礎となるものと確信しております。」と。

本校は、開校以来の校風・校訓とともに、総合学科改編時の「進学から就職まで多様な進路志望を見据え、一人ひとりの希望や個性に対応できる教育を実現する」という考え方も大切にしながら

ら探究学習等の教育活動にあたってまいりました。この間、2013年（平成25年）2月には「キャリア教育優良学校」として文部科学大臣表彰を受けるなど、まさしく島根県のキャリア教育のリーディングスクールとして成長を続けています。

部活動も目覚ましい活躍を見せています。1982年、昭和57年開催の「くにびき国体」において三刀屋町が少年男女ソフトボール会場に決定したことにあわせて創部された男子ソフトボールは「くにびき国体」で準優勝の栄誉を勝ち取り、以来女子ソフトボール部とともに毎年のように全国大会に出場しています。1978年、昭和53年に念願の甲子園出場を果たした野球部は、昨年度開校以来初のプロ野球選手を輩出し、2度目の甲子園出場目指して練習に励んでいます。体育系の部活動は、このほか昨年度の県総体第3位、新人戦でもベスト4に進出するなど近年躍進著しいサッカー部、昨年度部に昇格し市内各地のイベントに数多く参加して地域を盛り上げているダンス部など多くの部活動が活躍しています。

文科系の部活動では、JRC部が地域をフィールドとしてオリジナリティあふれる活動を精力的に展開し、地域の皆様との関係を深めながら年々活動の幅を広げています。また、演劇部は、昨年度の全国高校総合文化祭「2023かごしま総文」で第2位となる「優秀賞」「文化庁長官賞」の成績をおさめ、8月には国立劇場で開催された「全国高総文祭優秀校東京公演」にて大トリの大役を務めました。上演作品の『ローカル線に乗って』は、JR木次線をテーマにしたものです。演劇部は、前年度に「永井隆物語」を上演しており、地域に内在する課題等を高校生の視点で見つめなおし、地域資源を再評価していこうという動きにつながろうとしています。東京公演後には、県外在住の卒業生の方から「帰省するたびに老いて寂れていく故郷に心が痛んでいましたが、若い後輩たちという財産があることに気が付きました。ただただ母校を懐かしむだけでなく、そんな後輩たちを出来るだけ支援していきたいと思っています。」というお言葉もいただきました。本校の存在と生徒の活躍が、地元地域の皆様のみならず、地元地域を離れていらっしゃる皆様に対しても、活力をお与えすることができていることを実感しました。

総合学科である本校の強みの一つは「多様性」だと考えています。総合学科ならではの多様な設定科目、就職から進学までの多様な進路選択、そして文科系・体育系あわせて28の多様な部活動・同好会。「多様性」は選択肢の多さに直結し、生徒の皆さん一人一人の可能性の広がりにつながっていきます。しかし、開校までの歴史を踏まえると、この地に三刀屋高校があること、そのこと自体が多くの可能性を秘めた生徒の皆さんのチャレンジを後押しできる教育環境といえます。

昨年度から本校の合言葉を「向き合う。その先に…」としています。開校100周年を迎え、100年前の先人の願いや総合学科開設当初の思いに「向き合う」ことにより、校歌にある「歴史をかえりみ新たにいま」のとおり三刀屋高校の目指すべき新たな世界が開けていくと考えます。三刀屋高校が「ここにあること」、生徒の皆さんが「ここにいること」の意義を見つめ直し、この地域に三刀屋高校があっただけよかったと感じていただけるような学校づくりを地域・保護者・卒業生の皆様と協働していきながら進め、次の100年に向け「われらの三高ここにありとひとしくともに誇るべし」と思える学校となるよう教育活動につとめてまいります。

最後になりますが、この度の開校100周年を記念して、本日の記念式典をはじめ数々の記念事業を行うにあたり「開校100周年記念事業推進委員会」を組織し、献身的に取り組んでいただき

ました雲南会、体育後援会、PTAの皆様方に重ねて厚く御礼申し上げますとともに、本日ご臨席賜りました皆様方には今後とも一層のご指導とご支援を賜りますよう心からお願い申し上げ、式辞といたします。

令和6年4月17日

島根県立三刀屋高等学校  
校長 本間 達也